

柔道の団体戦における作戦の研究

(昭和55年10月31日 受理)

体育教室 橋 本 年 一

A Study of the Tactics in a Team Competition of Judo Toshikazu HASHIMOTO

I 研究目的

競技スポーツでは、試合の場面において作戦がその試合の勝敗に多大な影響を与えることは、よく知られているところであり、スポーツにおける作戦についての解釈は、広義・狭義にいろいろと解されているが、ここでは作戦を飯田の「一般的には相手に勝とうとして用いようとする試合のための計画」と解し、柔道試合の団体戦におけるオーダーを編成する場合の場について考えてみたいと思う。

柔道の試合においては、団体戦であっても対人競技であり、自己の心身のコンディションや実力などはもちろん重要なファクターであるが、団体試合の場合、オーダーの編成のしかたが勝敗に大きな影響を与えることをチームの監督などは、しばしば経験することである。すなわち、対戦相手によって嫌な相手や組みやすい相手などもあるし、相手チームのことばかりでなく、自チームの選手層などを考え、より有利に試合をすすめる方策（かけひき）など団体試合に勝つためには、自己や自チームと相手チームとの相対的關係において、自己や自チームのもっている能力や可能性をより有効に、より合理的に活用するとともに相手の個人やチームの技能の程度・得意・不得意な技能や作戦などについてよく知り、相手の機先を制する、相手の裏をかくなどの心理的な要素や選手の性格などを考えながら試合をより有利に展開するための具体的な策（オーダー）がたえられるものと思われる。

そこで本研究では、オーダー編成には、決定者のパーソナリティや試合の場のとらえ方などがかなり影響するものと思われるので、チームのオーダー決定に重要な役割をもっている各チームの監督に対して実施した「作戦に関するアンケート」の結果から、場のとらえ方をみていき、あわせて、北九州地区大学体育大会柔道試合の過去10年間の試合結果165試合、1155戦の分析の二側面から、柔道団体戦のオーダーを組むために重要と考えられる試合の場（大学で実施されている七人制団体戦の場——先鋒・次鋒・五将・中堅・三将・副将・大将——について）の特色を明らかにしようとするものである。

II 研究方法

柔道試合の団体戦における場の特色を明らかにしようと、今回は次のような方法で分析をこころみた。

1. 昭和55年北九州地区大学春季体育大会（昭和55年5月22日）時、各チームの監督（大学チームの監督歴・平均9年）に対して、「作戦に関するアンケート」の質問紙を複製し、質問紙法により調査を実施した。

その内容は、具体的なオーダー編成に関する考え方を知るための方法として、「相手チームを想定して作戦を立てる」場合と、「自チーム選手のことを中心に作戦を立てる」場合に大きく分け、それぞれについていくつかのカテゴリーにわけて回答を求めた。その中から、監督のオーダー編成時の場のとらえ方に関するいくつかの項目について分析をこころみた。

2. 北九州地区大学体育大会柔道試合の昭和45年から昭和55年春季大会までの165試合、1155戦の試合結果を、勝負が決まった場とその試合内容、副将戦まで有利に試合を進めてきたチームの大將戦での試合内容、先取点の場と試合結果との関係、決まり技の頻度、上位決まり技の名称と頻度などの側面から場の分析をこころみた。

III 結果および考察

1. オーダー編成への関与の仕方と決定時期

表1, 2は, “あなたは, チームのオーダー編成へどのような関与の仕方をしていきますか”, “オーダーを決定するのはいつごろですか” の問に対する回答結果である。

表1 オーダー編成への関与の仕方

1. ほとんど私が決める	—0
2. 私とO・Bの相談	—2
3. 私とキャプテンの相談	—2
4. 私と選手の相談	—3
5. ノータッチ	—0

表2 オーダー決定の時期

1. 試合当日決定する	—3
2. 試合日以前に決めておく	—1
3. 試合前にある程度決めておいて, 当日, 最終決定あるいは作戦変更あり	—3

これをみると、オーダー編成には、チームの監督が何らかのかたちでかわりを持ち、オーダーを決定するのは、試合当日、あるいは試合前にある程度決めておいて当日最終決定、あるいは作戦変更するケースがみられ、競技中の作戦対策は別としても、作戦が事前にたてられた場合であっても、その意図した作戦計画の遂行が予期に反した場合のより望ましい変更ということが必要であり、相手のポイントゲッターの配置や自チーム選手の当日のコンディションあるいは試合態度などにより、当日オーダーの最終決定、あるいはオーダーの変更が考えられているようである。

2. オーダー編成の試合結果への影響

オーダーの編成が、団体試合の結果に影響を及ぼすかどうかについて、表3-1・2は、“監督としての過去の経験から、オーダーが原因と思われる負け方をしたことがありますか”の問に対する回答結果と、各チームの柔道部員(学生)に、“柔道は、相対的競技あるいは対人競技といわれているが、団体戦の場合、オーダーの組み方がチームの勝敗に影響すると思いますか”の問に対する回答結果である。次に表4は、同じく学生に対して、“あなたは、柔道の団体試合を個人競技と見ますか、団体競技と見ますか”の問に対する結果である。

表3-1 オーダー編成の試合結果への影響(監督)

1. オーダーの組み方が原因で負けた経験がある	— 4
2. オーダーの組み方が原因で負けた経験はない	— 2
3. どちらともいえない	— 1

表3-2 オーダー編成の試合結果への影響(学生)

1. 影響する	— 91
2. 影響しない	— 3
3. どちらともいえない	— 4

表4 学生の団体試合に対する態度

1. 個人競技	— 49
2. 団体競技	— 4
3. どちらともいえない	— 8

これらをみると、監督は7人中4人が経験ありと回答し、学生は、団体試合を半数以上の者が個人競技としながらも、オーダーの組み方による勝敗への影響を98人中91人の92.9%の者が感じているようである。

3. 作戦の対象

表5は、“オーダー編成をする場合、あなたはどのようなことに重点を置いていますか”の問に対する回答結果である。

表5 作戦の対象

1. 相手チームを想定しての作戦が中心	— 2
2. 自チーム選手のことが中心	— 3
3. ケースバイケース	— 2

これをみると、チームの選手層の厚いチームは、相手チームを想定してオーダーを組み、選手層の薄いチームは、自チームのことを中心にオーダーを組むような傾向がみられた。

4. 相手チームを想定して作戦をたてる場合について

表6・7・8は、相手チームを中心に作戦をたてる場合について回答を求めた結果である。

表6 相手チームを想定して作戦をたてる場合について

1. 相手校のチーム力により作戦をたてる	— 3
2. 相手校のポイントゲッターの配置を想定して作戦をたてる	— 4

表7 作戦をたてる場合の相手校の程度

1. 自チームより問題にならないくらい強いチーム	— 0
2. 自チームと同等かやや上位とみられるチーム	— 5
3. 自チームと同等かやや下位とみられるチーム	— 1
4. 自チームより問題にならないくらい弱いチーム	— 0
5. 特定の対象校を仮定しての作戦ではなく、どの相手でも適用できるような作戦のたて方	— 1

表8 相手チームのポイントゲッターに当てる自チームの選手のタイプ

1. 自チームのポイントゲッター	— 1
2. 引き分けのできる選手	— 5
3. 負けてもしかたがない選手	— 1

“相手校のチーム力により作戦をたてるか、ポイントゲッターの配置を想定して作戦をたてるか”の問に対する回答結果は、表6の通りである。

そこで“相手校のチーム力により作戦をたてる場合、相手校は、自チームと比較してどの程度の強さのところですか”の問に対する回答結果(表7)を見ると、作戦をたてる相手校は、自チームと同等かやや上位とみられるチームに対する場合が多くみられる。

表8は、“相手チームのポイントゲッターの配置を想定した場合、その場には、自チームのどのようなタイプの選手を配置しますか”の問に対する回答結果である。

これを見ると、先鋒に最も重点が置かれ、つづいて中堅や副将の場への配置がみられた。

表11は、「「ポイントゲッター」「第2ポイントゲッター」「絶対に引き分ける選手」「負けてもしかたがない選手」といった選手がいると仮定した場合、それぞれの選手をどの場に配置しますか」の問に対する回答結果であるが、表10同様、先鋒、中堅、副将といった場が重視され、ポイントゲッターを先鋒へあつめる傾向がみられた。

表11 選手のタイプとオーダーの場

条件	先	次	五	中	三	副	大
イ. ポイントゲッター	5		1				1
ロ. 第2ポイントゲッター	1	1		3		2	
ハ. 絶対に引き分ける選手		2	1	2			2
ニ. 負けてもしかたがない選手		2	1		2		2

6. 試合の決した場について

表12は、団体戦の勝負が決まった場とその場の試合内容をまとめたものである。中堅で165試合中13試合の7.9%，三将で61試合の37.0%，副将で46試合の27.9%，大将で40試合の24.2%，代表戦で1試合の0.6%であり、引き分け試合（予選リーグ）は4試合の2.4%であった。これを見ると、三将で勝負が決まる場合が、他の場に比べてやや多いことを示している。ただし、決勝トーナメントだけをみると大将戦で決まる割合が高い。そこで大将戦まで勝負の決まらない45試合（大将戦で決まった40試合に代表戦の1試合と引き分けの4試合を含む）について、副将戦まで有利に試合を進めてきたチームをもとに、一本負けしなければチームが勝つ（副将戦まで一点差）試合、引き分ければチームが勝つ（副将戦まで内容差）試合、優勢勝ち以上すればチームが勝つ（副将まで同点）試合の三つに分けて、大将戦の試合内容をみたのが表13である。

表12 勝負が決まった場とその試合内容

レベル	場 勝敗 N%	場					代表戦	全 体		引き分	計
		中 堅	三 将	副 将	大 将	〇 △ ×		〇 △ ×			
予 選 リ ー グ	N	11	48 0 3	32 0 5	21 0 5	0	112 0 13	4	129		
	%	8.5	(51) 39.5	(37) 28.7	(26) 20.2		(125) 96.9	3.1	100		
決 勝 ト ー ナ メ ン ト	N	2	7 0 3	8 0 1	10 0 4	1	28 0 8	0	36		
	%	5.6	(10) 27.8	(9) 25.0	(14) 38.9	2.8	(36) 100		100		
計	N	13	55 0 6	40 0 6	31 0 9	1	140 0 21	4	165		
	%	7.9	(61) 37.0	(46) 27.9	(40) 24.2	0.6	(161) 97.6	2.4	100		

(注) ○は勝ち △は負け ×は引き分け

表13 副将戦まで有利に試合を進めてきたチームの大将戦の試合内容

条件	試合内容					計
	○	⊖	×	△	△	
一本負けしなければチームが勝つ(副将戦まで一点差)	5	1	6	0	3	15
引き分ければチームが勝つ(副将戦まで内容差)	8	1	3	1	8	21
優勢勝ち以上すればチームが勝つ(副将戦まで同点)	1	0	1	1	6	9
計	14	2	10	2	17	45

(注) ⊖は優勢勝ち, △は優勢負け

一本負けしなければチームが勝つ試合では、有利なチームが敗れて引き分けた試合が15試合中3試合で、不利なチームは、一本勝ちしなければ同点にならないという精神的負担が、技術面にも影響を与え、逆に6試合も有利チームに敗れるという結果になっている。つぎに、引き分ければチームが勝つ試合においては、勝ち負けが五分であった。これは、引き分ければという消極的な試合態度が、負けにつながったのではないかと考えられる。最後に、優勢勝ち以上すればチームが勝つ試合では、先取点を取り、有利に試合を進めてきたチームが、9試合中7試合敗れている。このようにしてみると、副将まで点差が少ない場合、おわれるチームは、精神的な負担が多分に影響し、逆転負けするケースが多くみられたと思われる。

7. 先取点と試合結果

先取点と試合結果との関係をまとめたのが表14である。

先取点を取り勝利を得た試合は、165試合中129試合の78.2% (決勝トーナメントだけをみると、80.6%) と、先取点はその試合に大きく影響していることがわかる。負けた試合は、32試合の19.4%、引き分けた試合が4試合の2.4%である。これを場別にみると、先鋒においては、165試合中112試合の67.9%が決しており、その112試合中83試合の74.1%が、先鋒が勝ちしかもチームが勝利を得た場合であり、先鋒が勝ちチームが負けた試合は、27試合の24.1%であった。先鋒が引き分け、次鋒で先取点を取った試合は、

表14 先取点の場と試合結果との関係

レベル	場 勝利 N%	先鋒			次鋒			五将	中堅	副将	全体			計
		○	△	×	○	△	×	○	○	○	○	△	×	
予選リーグ	N	64	21	2	23	4	2	8	5	—	100	25	4	129
	%	(87)			(29)			6.2	3.9		100			
決勝トーナメント	N	19	6	0	4	1	0	5	—	1	29	7	0	36
	%	(25)			(5)			13.9		2.8	100			
計	N	83	27	2	27	5	2	13	5	1	129	32	4	165
	%	(112)			(34)			7.9	3.0	0.6	100			

165試合中の34試合(20.6%)であり、その34試合中27試合(79.4%)は、チームが勝利を得た場合であり、5試合の14.7%が、チームが負けた場合であった。

五将で先取点を取った13試合(7.9%)、中堅での5試合(3.0%)、副将の1試合(0.6%)は、いずれも先取点を取ったチームが勝利を得ている。

さらに、ここではあげていませんが、先鋒、次鋒が勝って、チームが勝利を得た試合をみても、41試合中37試合の90.2%、負けた試合は、4試合の9.8%であり、二点先取したチームが勝利を得た試合は、102試合中96試合(94.1%)、負けた試合は、6試合(5.9%)であった。

こうしてみると、先取点がチームの成績に多大な影響を与えていることがうかがえる。特に、五将以降で先取点を取られた場合は、逆転できていない。これは、残りの対戦数の少なさが、選手のあせりとなって、技術面にも影響をおよぼすのではないと思われる。

8. 決まり技

場別に、決まり技の頻度をみたのが表15で、決まり技のうち上位を占める技の名称を場別にみたのが、表16である。

技有り以上の決まり技についてみると、足技が決まり技総数956本中388本(40.6%)と最も多く、足技の中では、内股が168本(43.3%)と多く用いられている。

場別にみると、先鋒で手技の背負い投に次いで2位であった以外は、いずれの場でも足技(内股)が多く用いられている。前半の場では、足技に次いで手技が多くなってい

表15 決まり技の頻度

技	先鋒	次鋒	五将	中堅	三将	副将	大将	全体
手技	47	26	30	24	26	28	21	202
腰技	7	13	11	14	15	15	14	89
足技	40	51	48	64	57	59	69	388
小計	94	90	89	102	98	102	104	679
真捨身技	2	1	2	0	1	0	0	6
横捨身技	2	2	4	0	1	2	3	14
小計	4	3	6	0	2	2	3	20
返し技	7	5	7	5	9	5	6	44
合計	105	98	102	107	109	109	113	743
抑込技	19	21	24	26	26	31	27	174
絞技	5	1	5	3	6	2	7	29
関節技	1	1	0	3	1	1	3	10
小計	25	23	29	32	33	34	37	213
総計	130	121	131	139	142	143	150	956
引分け	53	64	51	44	43	44	34	333
合せ技	19	20	18	18	20	24	20	139
反則	1					1	1	3
警告						1		1
痛み分け			1					1
小計	1		1			2	1	5

表16 上位決まり技の名称と頻度

() 内は実数

順位	先 鋒	次 鋒	五 将	中 堅	三 将	副 将	大 将	全 体
1	背負投(32)	内 股(19)	内 股(21)	内 股(34)	内 股(26)	内 股(23)	内 股(33)	内 股(168)
2	内 股(12)	背負投(15)	背負投(19)	背負投(15)	大外刈(14)	背 負 投(21)	大 外 刈(15)	背負投(122)
3	大外刈(10)	払 腰(11)	大内刈(11)	大外刈(15)	背負投(12)	払 腰(11)	横四方固(12)	大 外 刈(80)
4	けさ固(10)	けさ固(9)	けさ固(11)	けさ固(11)	けさ固(11)	大 外 刈(10)	けさ固(11)	けさ固(70)
5	体 落(8)	体 落(8)	大外刈(9)	払 腰(7)	払 腰(9)	小 内 刈(9)	背 負 投(8)	払 腰(60)
6	小内刈(7)	小内刈(8)	払 腰(8)	跳 腰(7)	返し技(9)	小 外 刈(8)	払 腰(8)	大 内 刈(48)
7	返し技(7)	大内刈(7)	返し技(7)		体 落(8)	上四方固(8)	小 外 刈(8)	返し技(44)
8		大外刈(7)			大内刈(8)	けさ固(7)	送 足 払(8)	体 落(38)
9							逆えり絞(7)	横四方固(34)
10								小 外 刈(31)
その他	17 (44)	21 (37)	19 (45)	16 (50)	20 (45)	21 (46)	15 (40)	30 (261)

るが、中盤から後半にかけては、足技に次いで抑込み技が多くなっている。

固技だけについてみると、956本中213本(22.3%)であり、その中では、抑込み技が174本(81.7%)と最も多く、特にけさ固めが174本中70本と多く用いられている。場別にみると、中盤から後半に多く、特に大将で多く用いられている。引き分けは、全試合数1155試合中333試合の28.8%で、場別にみると、前半の場、特に次鋒で多くみられた。

表中で、その他30(全体をみると)となっているのは、上記以外の技が30種類で、()内の261は、決まり技の総数を示す。

IV 要 約

各チームの監督への柔道団体試合の作戦に関するアンケート結果の分析と、昭和45年から昭和55年春までの北九州地区大学体育大会柔道試合延べ165試合1155戦の試合結果の分析から、柔道の団体試合における場の特色を見つけようと種々の角度より考察してきたが、その結果を要約するとつぎのようになる。

柔道の団体試合における監督の作戦のたて方から

1. オーダーの決定は、試合当日最終決定するケースが多くみられた。
2. 相手チームを想定して作戦をたてる場合、相手チームの実力が自チームと同等、あるいはやや上位とみられる場合に作戦をたて、相手のポイントゲッターには自チームの引き分けのできる選手をあてる作戦がもちいられている。
3. 自チーム選手を中心に作戦をたてる場合、自チーム選手の実力を念頭に置いたオーダーを組み、先取点を取ること、すなわち相手の機先を制することに重点が置かれ、ポイントゲッターを配置する場をみても、それが先鋒にあつめられる傾向が強い。

試合結果の分析から

1. 団体戦の勝負が決する場は、三将が全試合165試合中61試合(37%)と他の場に比べてやや多くみられた。しかし、決勝トーナメントでは、大将戦で決まる割合が高い。

2. 先取点を取り勝利を得た試合は、165試合中129試合の78.2%、負けた試合は、32試合の19.4%であり、先取点の獲得がその後の試合経過に大きく関与し、また、選手の心理面にも強く影響を及ぼしている。
3. 決まり技については、足技が、決まり技総数956本中388本(40.6%)と最も多く、足技の中では、内股が168本(43.3%)と多く用いられている。これを場別にみると、先鋒で手技(背負い投げ)に次いで2位であった以外は、いずれの場でも足技(内股)が最も多く用いられている決まり技である。固技だけについてみると、956本中213本(22.3%)であり、その中では、抑込み技が174本(81.7%)と最も多く、特に、けき固めが174本中70本(40.2%)と多く用いられている。固技の多く用いられる場は大將で、全体に中盤から後半の場で多く用いられている。引き分けは、全試合数1155戦中333試合(28.8%)で、前半の場、特に次鋒で多くみられた。

参 考 文 献

1. 飯田頼男「作戦の研究」柔道、講道館 '72 Vol.43 No.3
2. 金子修己「作戦の研究」柔道、講道館 '73 Vol.44 No.12
3. 飯田・尾形・小俣「作戦の研究」柔道、講道館 '80 Vol.51 No.4
4. 松田岩男他 スポーツ心理学概論 不味堂出版 1979
5. 松田岩男他 スポーツと競技の心理 大修館書店 1979